科 目 区 分：学校教育教員養成課程（必修科目）
　　芸術文化課程（コース選択科目）
授業科目名：指揮法

音楽指導者を育てる指揮法

音楽教育講座　井上　洋一

１　授業の目的

合奏，合唱等の表現力を，最大限に効果的に引き出すための技術が指揮法である。それには，タクトの技術だけではなく，スコア・リーディングやトレーナーとしての力も含まれており，教員免許取得のための必修科目になっている。

学生たちは，近い将来，地域や学校において，音楽の指導者としての役割が期待されている。本科目は，文字通り，音楽によって人を指揮「conduct=con(ともに）+duct（導く）」のための力を養うことを目的としている。

２　授業の概要

全15回の授業は，大きく４段階に分けることができる。

第１段階：指揮の原理，基本運動・基礎打法
第２段階：基礎的技法
　　（単純拍子・予備運動・終止など）
第３段階：応用的技法
　　（ワルツ打法・先入法・変拍子など）
第４段階：総合的演習と実技試験
　　（スコアリーディングと楽曲分析）

さらに，各段階を，こまかなステップに分け，理論解説，課題曲を使った実習，ビデオを利用した相互評価を反復しながら授業を進めている。第２～３段階は，従来通りの指揮実技練習が中心となるが，本授業では，音楽指導者育成を目的としているために，第１段階の音楽指導者としての指揮者の役割，第４段階の実践的な楽曲分析等に，特に重点をおいた。

３　授業研究と評価

(1) 公開授業の概要

第11回の授業を公開し，同時にカンファレンスを実施した。

授業内容は，「プロムナード」（ムソルグスキー作曲　組曲「展覧会の絵」より）を課題曲とし，指揮のための楽曲分析例の解説と実技演習を行うものであった。

(2) 授業の工夫点

本学では，オーケストラをモデルに用いることは難しい。第10回までは，主にピアノをモデルに指揮を行っていたが，課題曲の難易度も上がり，担当するピアニストの負担を強いることもあった。そのため，第11回以降は，合奏指揮特有の呼吸や間を経験し，より実践的な指揮の演習を行う効果も考え，アンサンブルをモデルに用いることとした。（公開授業では，木管アンサンブルを用いた。）また，変拍子を指揮する方法として，単純拍子の組み合わせた指揮のための楽曲分析を，具体的に譜例で示した。

(3) 学生の反応と変容

毎回，授業後に出席票と合わせて，感想や意見を提出させている。アンサンブルの指揮は，吹奏楽部等のクラブ活動を経験した者以外にとっては，ほとんどがはじめての経験である。「貴重な体験」「新鮮な感動」として大変，好評であった。

また，演奏を担当した管楽器専攻生にとっては，授業に貢献する機会が与えられたことや，友人たちの指揮者としての姿をみることによって，授業の違った楽しみを感じることができたようである。木管アンサンブル編曲に刺激を受けた学生が，自ら金管アンサンブルに編曲し，授業で用いて欲しいと申し出るなど，自主的な音楽活動を引き出すこともできた。

(4) カンファレンスの内容

公開授業を参観した教員から次のような意見を得た。（○成果　●課題）

○　ＤＶＤを用いたプロの指揮者の模範例やコンピュータを利用した譜例の提示，録画機器の準備など，効果的に情報機器を活用している。
○　学生で組織したアンサンブルをモデルに用いることによって，授業が活性化している。
○　授業の中で多面的な視点による評価が，

同時になされている。モデル演奏（演奏家）・他の学生（観客）・授業者（専門家）

○　演習後，同時間内にビデオを用いることにより，指揮をした学生の自己評価の視点も加わっている。効果的なフィードバックが実現している。

●　授業者の立ち位置や指揮の模範例の示し方には，後ろの学生への配慮が必要である。

●　大演奏室の広さに応じた音量調整や授業者の声量の改善が必要である。（大きすぎたり，聴き取りにくかったりする場面があった。）

●　ビデオ再生時に，リターンやストップを行うなど，もう少し，具体的な助言を与えることも有効ではないか。（授業時間との関係もある。）

●　１時間目の授業のせいか，３分程度の遅刻者が多数いた。

(5) アンケートによる授業評価

最終回の授業において，授業全体を振り返らせ，以下の15項目のアンケートを実施した。

1　初回に示されたシラバスにそった授業内容であった。
2　専門科目として「指揮法」を学ぶ意味が理解できた。
3　各回の授業の目標がわかった。
4　理論や実技の説明はわかりやすかった。
5　指揮の原理や指揮者の役割について理解できた。
6　指揮の基本的な技法（加速減速･平均運動等）が身についた。
7　指揮の応用的な技法（先入法・変拍子等）が身についた。
8　実習課題の選曲や譜例は適切であった。
9　映像資料やビデオの活用は効果的であった。
10　自分なりに，意欲をもって授業にのぞんだ。
11　自分としては，なるべく休まず出席できた。
12　自分にとって，受講しやすい雰囲気であった。
13　授業前後に予習・復習や指揮の練習をした。
14　「指揮法」の授業は自分にとって役に立った。
15　自由記述（感想）

１～１４番は，４：そう思う。　３：おおよそそう思う。　２：あまり思わない。１：まったく思わない。の中から最も近い考えを選択させた。以下の表は，各質問の４～１の回答者数と平均である。

（提出51名　受講生56名　回収率91.1%）

区分	質問	4	3	2	1	平均
計画目的	1	26	24	1	0	3.49
	2	33	18	0	0	3.65
目標説明	3	29	21	1	0	3.55
	4	28	22	1	0	3.53
授業内容 知識理解 技能習得	5	19	32	0	0	3.37
	6	21	21	9	0	3.24
	7	15	25	11	0	3.08
教材の効果 指導の工夫	8	27	21	3	0	3.47
	9	38	13	0	0	3.75
学生に関すること 意欲・態度等	１０	22	25	4	0	3.35
	１１	24	15	12	0	3.24
	１２	24	16	11	0	3.25
	１３	5	31	15	0	2.80
授業価値	１４	40	10	1	0	3.76

質問はその意図から上表のように区分でききる。以下に，上表をもとにした考察を行う。

(6) 度数と平均による考察考察

シラバスで示した授業計画や目的はおおむね理解されている。また，各回の前半で行った目標の提示，理論や実技の解説も，ほぼ適切に行うことができた。

授業内容では，指揮の原理や指揮者の役割など，今回，重点をおいた内容の理解については十分な結果といえるが，実技指導のうち７の応用技能の習得において，つまずきがあったものと思われる。

実習課題の選曲，譜例の準備など教材の選択についてはまずまずの結果であるが，改善の余地もある。機器を活用した指導の工夫は好評であった。

受講生に関する項目では，意欲はあるものの欠席してしまう，受講しやすい雰囲気とはいえないと答える学生が少なからずいる。これは，単に１時間目であるためだけではなく，上述の技能習得のつまずきとの関連を分析する必要がある。また，予習・復習の項目はとりわけ平均が低く，授業外での学習について適切な助言や指導を行うことができなかったことに原因がある。

しかし，指揮法の授業が，自分にとって役

に立ったと答えた人数が大変多かったことは，授業者として，望ましい結果であった。

(7) 相関からの考察

各回答から相関行列表を作成し，質問項目間の相関をみた。相関係数が比較的大きく，検定によって有意性が認められた主なものを下表に示す。

質問項目	相関係数	t値(level,両側検定)
６と　７	0.721	t=7.284**(1%)
１と　２	0.444	t=3.469**(1%)
１０と１２	0.430	t=3.334**(1%)
１１と１２	0.417	t=3.212**(1%)
７と１０	0.382	t=2.893**(1%)

サンプル数=51　自由度=49

６と　７の相関が最も高い。当然ながら，基礎技能の習熟が応用的な技能の習得につながる。

続いて，１と２の相関が高い。シラバスを適切に作成し，計画にそって授業を進めることによって，授業の意図や目的を伝えることができる。

１０～１２に相関がみられることから，授業の雰囲気が意欲や出席率に影響を及ぼす。授業の雰囲気と実技習得状況との関連を疑ってみたが，１２と５～７の相関は低かった。技能と学生に関する項目の中で比較的相関が認められたのは，７と１０の応用的な技能の習熟と授業への意欲の関連である。

(8) 受講生の意見（自由記述から）

１５の自由記述の欄に書かれた学生の意見には次のようなものがあった。今後の授業改善の参考にしたい。

○　指揮の基礎から学べたのがよかった。
○　楽器を吹けたのがうれしかった。
○　アンサンブルを指揮できたのがよかった。
○　ビデオで自分の指揮の改善点を発見した。
○　指揮の仕方だけではなく，楽曲の組み立て方を学べたのがよかった。
●　半期では短かった。
●　解説～実習～ビデオと少し，ワンパターンに感じる時があった。
●　自分の指揮のビデオは参考になったが，他の人の指揮は２回みることになるので，効率の悪い面があった。
●　２・３回生の合同授業で，人数が多く，個人指導が少なかった。

４　今後の課題

昨年度，教員組織の関係で，指揮法は開講されなかったために，今年度は，２・３回生の合同授業となった。４回生以上の受講生も加え５６名の大人数の授業となり，学生の指摘する通り，個別指導の時間は不十分であった。来年度以降は，学生定員も減少していることから，１学年（１０数名）での授業となる。時間的な制約は，多少，解消されると思われる。

ビデオの活用は，非常に効果的ではあるものの当事者以外にとっては非効率な部分もある。授業内では抽出生のみを再生したり，授業外で動画を記録したＤＶＤ等を学生に返したりするなど，工夫・改善を図りたい。

今年度，あまりよい結果を得られなかった，応用技能の習得のための具体策として，新たな教材開発や指導法の工夫，また，授業外の予習・復習についての助言等を考えていきたい。

重点をおいた，音楽指導者としての力を育成することについては，その意図を，学生は十分受け止めてくれている。来年度も，アンサンブルをモデルに使い，音楽作りに役立つ，より実践的な指揮法の授業を目指していきたい。